様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０２０

研究課題名（和文）中世末期世俗美術の展開―1400年頃の北伊・南仏間の芸術家と作品の移動をめぐって

研究課題名（英文）The Development of Secular Painting in the Late Middle Ages: from the Perspective of Artistic Transfer between Northern Italy and Southern France around year 1400.

研究代表者
高木　麻紀子（TAKAGI, MAKIKO）

東京藝術大学・美術学部・助手

研究者番号：８０７０９７６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：申請者の最終目的は中世末期の世俗美術の展開の諸相の解明である。本研究では1400年前後に北伊・南仏で制作された世俗主題の絵画作品から特に狩猟図がみられる作品に注目し、その実態と伝播を、作品分析を基盤としつつ、場とパトロン、芸術家と作品の移動という観点からも考察することを目的とした。
　研究成果で特筆すべきは、14世紀末のアヴィニヨンで制作された『狩猟の書』写本の狩猟図とほぼ同時期に制作された南ティロルの壁画の狩猟図との間に留意すべき類縁性が見出された点である。さらに、作品成立の歴史的背景の考察を通じ、この類縁性は当時の南仏と南ティロルをめぐる文化および政治交流に起因することが推察されるに至った。

研究成果の概要（英文）：The conclusive aim of my research is to understand how the secular paintings developed in the late middle ages. The current research focuses on the secular paintings in northern Italy and southern France around year 1400, especially of those depicting hunting scenes. Critical analyses were made on the diffusion of hunting iconography not only through its formal aspects, but also through the perspective of cultural milieu.
　This study reveals the remarkable iconographic similarities between the scene of “venerie” of the illustrations of “Le Livre de la chasse” executed between the end of the 14th century at Avignon and those of wall paintings from the same period exist in South Tyrol, northern region of Italy. Furthermore, historical analysis points out that such similarities were influenced by political and cultural liaison between southern France and South Tyrol in the period.

研究分野：西洋美術史

キーワード：世俗美術　狩猟図　国際ゴシック様式　自然表現　1400年　南ティロル　アヴィニヨン　西洋美術史

１．研究開始当初の背景

（1）これまでの研究史とその問題点:　キリスト教が絶対的な力を有していた西洋中世では、自ずと宗教主題の芸術作品が中心的に制作されたが、末期に至り、王侯貴族が権威を伸長させると、彼らの宮廷周辺ではより此岸的な主題を扱った芸術作品が制作されるようになった。しかし、こうした世俗主題の作品研究は、未だ宗教主題のそれに比して遅れをとっており、さらに、散逸した作例も多いため、僅かに残されパズルのピースを手掛かりにその全体像を想像する他ない。

こうした状況を踏まえ、中世末期世俗美術の一端を解明するために申請者が注目してきた作品が、14 世紀南仏の大領主フォワ伯ガストン・フェビュスが著した『狩猟の書』の写本群（現存写本 46 冊、うち挿絵入り 27 冊）の挿絵である。本作品は、特にテキストを貫く自然主義的・経験主義的な姿勢において画期的であったことが文献学・文学史研究から指摘されてきたが、美術史的観点からも、特に自然・風景表現の発展史を考察する上で極めて重要な作例と言えるのである。なぜなら、14 世紀末に南仏アヴィニヨンで制作された最初期の『狩猟の書』の挿絵には、フランスではこれらの先例を見つけることが困難な、時代の先端をゆく動物、自然表現が見出されるからである。だが、『狩猟の書』に対する美術史からの研究は、挿絵画家の帰属を問題とする研究（F. アヴリル／M. トーマス、1976, 1998; Ch. ステルラン、1987 等）は存在するものの、十分になされてきたとは言えず、また、申請者が研究を開始した当初は、網羅的に写本群を扱うコーパスも存在しない状況にあったのである。

（2）これまでの研究成果と本研究へ至る背景: 以上の背景を踏まえ、申請者はまず『狩猟の書』の挿絵研究の基盤を整備すべく、留学の機会も活用して可能な限り写本を実見し、カタログの制作、現段階での系統樹の作成を第一課題とした。この成果は博士論文第 3 巻 Appendix に収めた。この結果、46 冊の写本は、中世末期のある限定された時間と地域の中に存在し、なかでも 27 冊の挿絵入り写本は、14 世紀末に南仏アヴィニヨンで成立したのを皮切りに、ほぼ 15 世紀フランスで制作されたことが確認できた。このことから、『狩猟の書』の挿絵入り写本は、絵画芸術における大きな転換期を挟む 15 世紀フランス写本画の様式的動向を考察するのに極めて適したマテリアルを提供していると言えるのである。よって博士論文では、各写本の挿絵の造形分析に今一度立ち返り、15 世紀フランス写本画の動向を前提とした上で、その変遷の諸相を解明することを試みた。

今回の研究課題へと至る上で重要であったのは、博士論文の前半部分で取り組んだ、最初期の『狩猟の書』写本（パリ、国立図書館 ms. fr. 619; サンクト・ペテルブルク、エルミタージュ美術館 OP no. 2）の挿絵が、どのような基盤のもとに形成されたのか、という問題である。申請者は、同時代の現存作例との比較分析を通じ、その着想源の一つとして、14 世紀末にミラノを中心とするロンバルディア地方で制作された健康マニュアル『タクイヌム・サニターティス』の挿絵を指摘した。当時のロンバルディア絵画は、自然主義的な動植物の表現で群を抜いていたが、詳細な比較分析をした結果、『狩猟の書』写本の挿絵に見られる自然主義的な動物表現、そして季節感に富む豊かな風景表現に、その直接的な影響が推察されたのである。ここで留意したいのは、『狩猟の書』は世俗写本であったからこそ、直接的な自然観察の造形化が目指されたロンバルディアの新たな絵画動向を、いち早く取り入れることが可能だったという点である。越宏一氏が「世俗の美術では、芸術的想像力は検閲なしに羽ばたくことができたし、また、画家は宗教美術よりも、形体の約束事から自由になって仕事することができた」(『風景画の誕生』岩波書店、2004 年）と指摘するように、『狩猟の書』の挿絵は、テキストからも自然主義的な動植物の表現が保証された故に、当時の芸術家の新たな創造の実験場の一つとなり、新たな絵画動向をフランス絵画へ運ぶ重要な媒体になったと言えるのである。こうした一連の造形観察から導いた考察結果を踏まえ、申請者が改めて注目したい点は、最初期の『狩猟の書』が制作されたのが、当時、政治的・地理的背景からイタリアの影響がフランスへ伝播する際の要衝となっていた南仏アヴィニヨンであったという点、そして、『タクイヌム・サニターティス』が制作されたロンバルディアの中心都市ミラノのヴィスコンティ家と、オルテズを中心とする南仏のガストン・フェビュスの宮廷との間に交流があったことが、音楽史の側から指摘されている点である。つまり、1400 年前後の北伊・南仏が緊密な政治的・文化的交流の下、一つの「文化圏」のような様相を呈していたこと、そして、こうした背景こそが、この地域における先鋭的な世俗美術発展の要因となっていたことが考えられるのである。

２．研究の目的

以上の研究背景を踏まえ、申請者はさらに、中世末期の世俗美術の展開の諸相を、より広い視点から考察し、解明することを目指している。中世末期の世俗美術の研究は、未だ西洋本国においても十分になされておらず、体

系化のためには膨大な時間を要する。今回注目するのは、『狩猟の書』の挿絵も含まれる、1400年前後の北伊・南仏で制作された、豊かな自然表現を伴う世俗絵画、なかでも特に狩猟場面が見られる作例（※下記参照）である。その実態を、調査に基づく実証的な作品分析を基盤として明らかにし、さらに、その考察結果を、場とパトロン、芸術家と作品の移動という観点を組み込むことで補強していく。このような本研究では、以下の3点の結果と意義が見出されると考えられる。まず 1400年前後の北伊・南仏が世俗美術の発展、特に現世肯定的な風景表現が育まれる場となっていたことが、実作例と共に明らかになるであろうこと。北伊・南仏間の宮廷の交流が、この地にある種の「文化圏」を作り出し、こうした発展の要因となっていたことが浮かび上がるだろうこと。さらに、宗教美術を主流として形成されてきた中世末期の絵画の時代様式観に対し、世俗美術が為した貢献が、従来以上に意義深いものとして認識されること。

※【主な調査対象作例】壁画：トレント、ブオンコンシーリオ城、鷲の塔「月暦壁画」；南ティロル、ボルツァーノ近郊、ルンケルシュタイン城、世俗壁画；南ティロル、リヒテンベルク城、世俗壁画断片（現在はインスブルック、ティロル州立博物館フェルディナンデウム所蔵）；アヴィニヨン、教皇宮殿、ガルド・ローブ塔、〈鹿の間〉壁画；アヴィニヨン、旧ヴィヴィエール館、壁画；ソルグ、ジャンヌ王女の館、壁画断片（現在はアヴィニヨン、プティ・パレ美術館所蔵）など；写本画：『タクイヌム・サニターティス』（特にパリ、フランス国立図書館N. a. l. 1673を中心とするロンバルディア地方の写本）；『ハミルトン・フィールドの時禱書』、「月暦図」（ダブリン、チェスター・ビーティー・ライブラリーWms. 94）など；手本帖および素描帖：パリ、ルーヴル美術館版画素描部門Cabinet Edmond de Rothschild, d.R. 841-860；パリ、ルーヴル美術館版画素描部門 Cabinet Edmond de Rothschild, inv. 754-763；パリ、ルーヴル美術館版画素描部門Inventaire 2568など。

３．研究の方法

申請者は大きく分けて以下の3つの観点から本研究の進展を図った。これらを最終的に総合することで、中世末期のより実態に近い世俗美術の展開の諸相が浮かび上がることが期待されるからである。

（1）対象作例の実地調査と図版、資料の収集：申請者が今回研究対象としたのは、1400年前後の北伊・南仏で制作された世俗テーマ、特に狩猟場面が見られる絵画作品（主に壁画、写本挿絵、手本帖および素描帳）であるが、なかでも「研究目的」で記した作例に注目した。特に、トレントのブオンコンシーリオ城に残る、季節感に溢れる風景の中に、狩猟を始めとする人間の営みが生き生きと描き出された壁画に関しては、B. クルト（1911）による重要なモノグラフィーが存在するが、その他の作例に関しては、その重要性が断片的に指摘されることはあったものの、未だ鮮明なカラー図版が公的刊物に掲載せれたことがないものも存在している。申請者はこれまで、『狩猟の書』写本群の挿絵研究を進める傍ら、これらの作例の図版・資料の収集に取りかかってはいたが、さらに充実させると共に、実地調査を行って写真撮影を敢行し、全体像の解明に努めた。

（2）各作例のイメージの分類およびその変遷に関する考察――「狩猟図」を手掛かりに：①の実見・調査を基盤として、各作例を、図像および様式的観点から詳細に分析・考察する。これを踏まえた上で、その発展、変遷過程を推察する。その際、手掛かりになると申請者が注目したのは、1400年前後の北伊・南仏で制作された世俗絵画の多くで取り上げられている、王侯貴族による森の中での狩猟場面、所謂「狩猟図」である。既に申請者は『狩猟の書』写本の挿絵研究の際に、特に中世の写本挿絵における「狩猟図」の図版を収集していたが、さらに壁画も研究対象に加え、より幅広い考察を目指す。これにより、各作例が有する図像・様式的特徴が明らかになると共に、各作例間の関係性が浮かび上がると考える。

（3）各作例の場とパトロン、芸術家および作品の移動に対する考察：各作例の場とパトロン、芸術家および作品の移動に対する考察：（2）で得られた考察結果を踏まえ、各作例間における図像の変遷過程、また図像の伝播手段・経路をより解明するために、隣接諸学科（歴史学、文献学など）の成果を積極的に活用する。まず、制作された場とパトロンに関する考察では、歴史学の成果を享受する。ロンバルディアの中心都市ミラノのヴィスコンティ家に関しては、フランス王家と緊密な関係にあったことが既に知られているが、今回、申請者はさらに、こうした北イタリアの宮廷と、南フランス、特にアヴィニヨン教皇庁およびその周辺の高位聖職者・王侯貴族との交流に関して考察する。

図像の伝播手段およびその経路をさらに実証的に裏付けるために、これらの地域における芸術家および作品の移動という観点を組み込みこむ。そのために、蔵書目録や会計報告といった一次史料にも目を配る。こうした作業により、中世末期の世俗美術が展開したその環境を、単に造形的側面からだけでなく、文化史的背景からも復元することが叶うと考える。

４．研究成果

以下、本研究課題による成果を、「３．研究の方法」の３つの観点に従って記す。

研究の方法（1）に基づく成果:本助成金により海外調査が実現し、研究対象としていた貴重な壁画群に対し、予定通り撮影含む実地調査を敢行することができた。

また、フランス国立図書館写本室、ルーヴル美術館版画素描部門でも関係者のご理解、ご助力を賜り大変貴重な写本、素描の実物を調査させて頂いた。これにより、本研究基盤の整備が進み、（2）の分析へ進む土台を築くことができた。

こうした個別作品の基礎研究の一部は、研究成果の②、④として発表した。また、必ずしも学術的な新知見を記したものではないものの、申請者が研究対象としている作品の魅力をより多くの人々に伝えたいとの願いから、これらの作品を取り挙げつつ幅広い読者層へ向けたエッセイの執筆も行った（研究成果の③に該当）。

研究の方法（2）に基づく成果: 研究の方法（1）により、特に1400年頃の北伊・南仏で制作された狩猟場面が見られる作例を収集、分類し、中世末期における「狩猟図」の展開を考察する基盤が整った。具体的に考察を進める上で、申請者は今回、これまでも研究を進めてきた 14 世紀末のアヴィニヨンで制作された『狩猟の書』写本における「騎馬による狩猟」場面が描かれた挿絵を中心に据え、その図像源泉の考察を通じ、中世末期のこの地域における狩猟図の伝播の具体相の解明を試みた。

その結果、『狩猟の書』写本の挿絵における個々の動物描写（後脚で頭部をかくシカの表現等）や季節感の表現には、既に申請者が見出していたように、ミラノ、ヴェローナの宮廷周辺で 14 世紀末に制作された『タクイヌム・サニターティス』写本との親近性が認められた。一方で、「騎馬による狩猟」場面が描かれた挿絵に注目すると、構成要素および構図の点でより接近するのはむしろ、『狩猟の書』とほぼ同時期あるいはやや後に制作された、南ティロルに現存する壁画として描かれた狩猟場面であることが明らかになった。

まず、『狩猟の書』における「騎馬による狩猟」図を、先行する「騎馬による狩猟」図像から分かった特徴は、以下の２点に要約できる。一つは、草花が生い茂る緑野、所謂〈綴れ織り風景〉が画面を大きく占めていること。言い換えれば、狩猟行為は今や風景の中に取り込まれつつあると考えられる。もう一つは、狩猟に関わる登場人物が、宮廷的ヒエラルキーに基づいて視覚化されていること。即ち、王侯貴族と勢子という階層のヒエラルキーによりサイズが定められた人物群が、さらに平面上で上下に配置されているとも考えられるの。

この二つの要素を兼ね揃える同時代作例の一つが、ルンケルシュタイン城の狩猟図である 。トレント近郊、ボルツァーノの小高い丘に聳えるこの城は、1385年、神聖ローマ皇帝アルブレヒト１世の孫にあたるオーストリア公レオポルド３世の財務官も務めたニクラウス・ヴィントラーとその弟フランツの所有となり、修復と増築が実施された。やや後に、一連の壁面装飾の制作も開始されたと考えられているが、狩猟場面は〈馬上槍試合の間〉と称される大広間に壁画として見ることができる。

もう一点も、やはり南ティロル地方に残る現在は廃墟と化したリヒテンベルク城の壁画断片であり、制作は 1400 年頃と考えられている。

はたしてこれら壁画による「騎馬による狩猟」図像は、『狩猟の書』の挿絵の影響下に制作されたのであろうか。申請者は、本研究と通じて、おそらくこうしたある種の階層のヒエラルキーと〈綴れ織り風景〉から形成された「騎馬による狩猟」図は、『狩猟の書』が最初に制作された土地アヴィニヨンに、やや先立って存在していたのではないかと考えるに至った。即ち、『狩猟の書』の「騎馬による狩猟」図像も、南ティロルの壁画も、このアヴィニヨンの散逸した手本から派生した作例と思われるのである。

その主な理由は以下の３点である。①フランス人教皇クレメンス６世（在位 1342-1352）の指揮で増築されたアヴィニヨン教皇宮殿ガルド・ローブ塔の４階にある〈鹿の間〉の狩猟壁画に、〈綴れ織り風景〉を背景に展開する、「観念像」としての狩猟図への萌芽が看取できること。②本調査を通じて、14世紀アヴィニヨンに際立った数の狩猟壁画を見出すことができたこと。③ルンケルシュタインの壁画の背景装飾に、1330-40 年代にアヴィニヨンを中心とするローヌ河流域で制作された世俗主題の壁画との類縁性が見出されること。

研究の方法（3）に基づく成果: （2）の成果により、アヴィニヨンで 14 世紀末に制作された『狩猟の書』の図像と、南ティロルの城館装飾の図像との間に留意すべき類縁性が浮かび上がった。場も媒体も異なるこれらの作例間における図像上の親近性の所以を、（2）では主として造形的観点から、14 世紀のアヴィニヨンに求めたが、さらに、文化・政治的背景からも考察を進めた。その結果、特に 14 世紀のアヴィニヨンと南ティロルとの関連についてはむしろ、芸術家を取り巻く環境から保障されることが推察されるに至った。

『狩猟の書』と南ティロルの壁画の手本を推察する上での鍵となったアヴィニヨン教皇宮殿の〈鹿の間〉は、クレメンス６世が自身の個人的な書斎且つ寝室として設えさせ

た部屋であったが、この豪奢絢爛な嗜好を持つフランス人教皇は、かつて神聖ローマ皇帝カール4世の教師を務めた人物であり、さらに、カールの皇帝就任（在位 1355-1378）に強い後押しをしたのも彼であった。共に芸術保護活動に熱心であった2人の緊密な交流を鑑みるならば、かつて C. カステルノォーヴォや M. ラクロットも看取したように 、アヴィニヨン教皇庁と神聖ローマ帝国領との境界付近に位置するティロル地方の芸術に、アヴィニヨン芸術の影響が見られたとして不思議ではないと考えられる。

単に地理的に近接しているのみならず、14世紀のこうした緊密な政治・文化的交流が、アヴィニヨンとティロル地方における芸術上の類縁性に寄与したのである。それはまさに「国際ゴシック」様式の誕生背景でもあるのだが、本研究で取り上げた狩猟図とその展開は、当時の北伊・南仏間における芸術交流の在り様を映し出しているという点においても、従来の評価以上に意味深長であると言えるだろう。なお、この一連の調査・分析結果を研究成果の①として纏めた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）
①<u>髙木麻紀子</u>「西洋中世末期の狩猟図の展開に関する一試論――14 世紀末アヴィニヨン制作の『狩猟の書』を中心に――」『Aspects of Problems in Western Art History』vol.13、2015年刊行予定（査読あり）
②<u>髙木麻紀子</u>「東京藝術大学付属図書館所蔵・中世ファクスミリ研究: 《狩猟の書》(パリ、国立図書館 ms. fr. 616)」『Aspects of Problems in Western Art History』vol.13、2015年刊行予定（査読あり）
③髙木麻紀子「フランス――マダムと野菜をめぐる追想」『食品と容器』56 号、2015 年、pp. 46-51.（査読なし）
④<u>髙木麻紀子</u>「東京藝術大学付属図書館所蔵・中世ファクスミリ研究: 《タクイヌム・サニターティス》（ウィーン、オーストリア国立図書館 Codex vindobonensis series nova 2644)」『Aspects of Problems in Western Art History』vol.12、2014年、pp. 98-103.（査読あり）
⑤<u>髙木麻紀子</u>「メトロポリタン美術館クロイスターズ蔵〈一角獣のタピスリー〉の図像をめぐって――『Search for the Unicorn（一角獣をさがして)』展を機に――」)『Aspects of Problems in Western Art History』vol.12、2014年、pp. 69-78.（査読あり）

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

６．研究組織
（1）研究代表者
髙木麻紀子（TAKAGI MAKIKO）
東京藝術大学・美術学部・助手
研究者番号：80709767

（2）研究分担者
なし
（3）連携研究者
なし